

回想録

昭和三十年度PTA会長 黒川 幸夫

防空頭巾に背一杯のランドセル、一刀彫の土佐人形のような長男の一年生の時の姿が、今も尚、印象強く頭に浮ぶ。私の思い出は、ここから始まるのである。

昭和十九年、戦も終わりに近く、安全の地千里山の小学校に子供を入学させたものの、大阪市内とは、何十年もの距りを深く校舎に刻んだこの学校へ、嬉々として通う吾が子の姿にあわれを覚えたのもこの時である。併し負け戦にあえぐ祖国とは別に、子供達は日本人としての誇りを持っていたようだ。

やがて戦は終わり、人々は学校が戦災を免れたことを喜び合い、教育方針は百八十度で転換されたが、その日の糧を求めるに急な吾々の視線は、いつしか学校から遠ざかり、学校が吾々の意識の上に再び、はつきり浮び出したのは、保護者会がPTAと改められた頃

からであった。PTAは今迄の保護者会と異なり最も民主的方法に依って組織された両親と教師の団体と説明されたが、所詮は物心両面からする学校の援護団体に外ならなかった。併し吾々は、貧しい環境の中で勉強を続ける子供達のために、一臂の力を致すのを当然とし、寧ろそんなことに喜びを覚えた。見るも無惨に焼けただれた大阪市内の学校が、着々と復興する中に、吹田市は財政貧困の故に、老い朽ちた学校へ過大な児童を收容し、無理な授業を続ける実情を何とかして打開せんと、必死の努力を重ねるPTA幹部の姿を、私は謙虚な気持ちで見守っていた。

昭和三十年、先輩の後を受け、私がPTA運営の責めを負った時、講堂が白蟻に蝕まれ、これを鉄筋コンクリートに改築するために四苦八苦したのであるが、その時、全会員、地元の方々の寄せられた暖かい支援は、今思い出しても胸があつくなる。又、辛うじて得た貧しい予算で、後世に残る豊かな内容を盛るために、筆舌に尽くし得ない努力を重ねた大道課長の努力は、百五十名を收容する中二階と言う形で報いられたが、その大道課長も一昨年故人となり、今は氏の古武士的風俗に接する術もない。

昭和三十三年には新校舎が建ち、学校はPTAと同体の形で着々と近代化され、勉学の環境は日一日と良くなるが、終戦後、組織された教員組合を中心に教育界に渦巻く嵐は、何時治ることであろうか。神の如き純真な幼い者達に、右に左に揺れ動く師の心は、どんなに写るであろうか。

四人の子供がお世話になって十数年、その最後の一人が卒業した三十二年、私も懐かしいPTAから去った。そして二年、学校の思い出は尽きず、而も筆の運びは余りにも拙い。

多くの稿の中に伍し、せめて群鶏の一羽たることを願ひ筆を擱く。

追記（二七回生 萩原）

個人的な話になりますが、私は小学校の低学年の折、鼻が悪く母に連れられ、あちこちの耳鼻咽喉科に通っていました。大人になってからの鼻の手術は難しいので幼いうちに扁桃腺を手術で除去した方がいい、というのが多くの先生の意見でした。最後に当時野田阪神の福島で耳鼻咽喉科の医院を開いておられた黒川先生に診ていただき、「扁桃腺は切らずに足を鍛えなさい」といわれ、母はその意見に従いました。その言葉はいつしか忘れてしまいました。結果的には中・高・大（野球・ラグビー）と体育会系運動部に所属し、足を鍛えることになりました。以来ずっと今迄、頑強な部類に属してこられたのは黒川幸夫先生のお陰と思っております。